

新潟医療センターニュース

第45号

発行 新潟県厚生連労働組合新潟支部
発行責任者 仁 蕪澤 仁



放射線のお話

～がんの早期発見と放射線のリスク～

放射線科医 高橋 おがわ

放射性同位元素を用いた核医学検査装置

放射線科には、検査を行う放射線技師だけでなく、放射線を専門とする医師もいるのをご存知でしょうか。今月号では、当院の放射線科医として活躍される高橋おがわ先生より、放射線に関する興味深い医療講話を頂きたいと思っております。

皆さんは新潟医療センターの放射線科で検査を受けたことがありますか？ 放射線科では画像を撮影する検査を主に扱っています。「放射線科」と言っても放射線を使っていない検査もあるのですが、やはり主流は胸のレントゲンなど放射線を使った検査となるので、現在でも「放射線科」という名称を使用しています。

皆さんは「放射線」という言葉にどのようなイメージを持っていますか？ 一八九五年にド

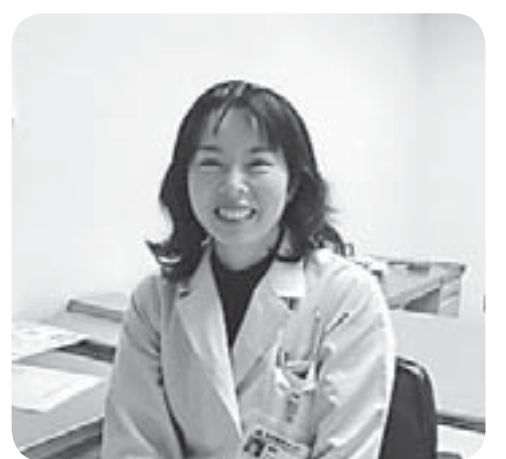
イツのレントゲン博士が放射線を発見して以来、現在の医療では、この人体の中が透けて見える便利な道具を使った画像検査が目覚ましく普及・発展してきました。ただ、約二年前に起きた東日本大震災による原発事故以来、放射線の特に被ばくに関しては、国民全体が非常に強く関心を持っている事項の一つとなつたと言えます。

日本にはかつて広島と長崎への原爆投下という悲しい歴史があります。これ以降、原爆被爆者を対象とした大規模かつ長期間にわたる調査がなされ、放射線の人体に対する影響は、かなり詳細に研究されてきました。それでも、病院の検査で使用するような僅かな量の放射線被ばくが、人体に影響があるのか無いのか証明できなかった事項がありました。これを専門用語で「確率的影響」と言い、「発がん」がこれに含まれます。ただ、放射線以外にも発がんのリスクを高める因子が世の中にはたくさんあふれています。たばこやアルコール、

ストレス、紫外線、食品添加物などが複合的に絡まることにより、発がんのリスクが高まるとされています。このように考えると、特に放射線に限ったことではなく、私たちの日々の生活の中では、あらゆる種類の危険と隣り合わせということになってしまいます。私たち医師の立場からは、レントゲン検査が必要と判断した時には、速やかに検

放射線科医は、どんな仕事をするの？

放射線科医は、大きく二つの専門に分かれます。放射線科に関わる様々な検査の診断を行う「放射線診断医」と大きなエネルギーの放射線を利用し、主にがんを治療する「放射線治療医」です。当院の高橋おがわ先生は「放射線診断医」として十四年間の経験を積んだ画像診断のスペシャリストです。



放射線科医 高橋おがわ

放射線科で行う検査と言っても様々です。CT検査や核磁気共鳴を利用したMRI検査、放射性同位元素を利用した核医学検査(RI)、血管造影等といった、高性能コンピュータを有した大型の放射線機器を用いる検査がほとんどです。その為、従来と変わらない放射線の量であっても、得られる画像は莫大です。

例えばCT検査で胸から腹部骨盤まで撮影すると、約一五〇枚の画像が得られます。画像一コマ一コマ隅々まで丁寧に観察し、解析して必要な情報を取り出し、主治医に結果を報告するのが高橋先生の仕事です。患者さんと直接お話しをする機会は少ないかもしれませんが、新潟医療センターの診断を支える縁の下の力持ち的存在です。(記事/大橋)

査をし、なるべく早期に病気を発見、治療することが患者さんにとって最も有益だと考えています。皆さんの主治医は検査を受けることにより生じる弊害と、検査を受けなかったことにより生じる弊害とを詳細に比較し、常に最適な検査方法を検討しています。なので、これからも安心して放射線科の検査を受けて頂いて大丈夫なのです。